連載 第25回

福聚山史

池浦泰憲 及川晋一 文編

大正から昭和にかけて

7、柴田一能上人の原点

前回は、常円寺三十六世柴田一能上人が、日中戦争の進行という社会情勢の中で、自らが学び、肌で触れてきた西洋文化を否定していったことについて触れた。しかし、連載21回で書いた日蓮宗大学林（立正大学の前身）の創設や、その大学林と慶應義塾での英語・倫理学・心理学の講義などは、西洋の社会に触れ、学問を学んだ成果である。また、上人が弟弟子である山田一英上人（のちの常円寺三十四世本覚院日眞上人）とともに、昭和七年（一九三二）十月、東京南千住に開設した立正診療院は、キリスト教が進めていた医療事業をアメリカで見聞した経験に基づいたものであった。このように上人が、大正～昭和初期にかけて残した多くの事跡には、西洋文化を学び、接してきた経験がその基盤にあったことは間違いないであろう。今回は、明治三十四年（一九〇一）から約二年間にわたる西欧留学における一能上人の言葉を通じて、その原点を探ってみたい。

明治三十三年（一九〇〇）慶應義塾を卒業した一能上人は、翌明治三十四年五月二十八日、横浜から金州丸という船に乗りアメリカに向かう。このとき一能上人のほか、他宗も含め数人の僧侶が留学生としてアメリカに渡った。渡米後、アメリカのコネチカット州にある名門エール大学に留学する。大学では主に哲学や倫理学を専攻し、その権威であるラッド教授に師事して西洋的思考を学んだ。明治三十五年（一九〇二）六月、一能上人はエール大学より《マスター・オブ・アーツ》の学位を授与される。しかし、渡米直後、師匠の及川眞能上人に宛てた明治三十四年六月二十九日付の書簡では、「成る可く身体を大切に無理な勉強をせず、寧ろ社会上の観察を努め、高き学位等は後進の若手に委ね申す可しと考え居り候」と、学位の取得よりも初めて訪れる西洋の社会の観察を第一とするとしている。

一能上人の留学は、上人の母校である慶應義塾との縁によるものであったが、留学が決定すると宗門では『柴田一能師告別演説会』が開かれるなどした。一能上人の海外留学は日蓮宗の教育の充実という点において、宗門が大いに期待するところであったと考えられる。こうした期待から、宗門では一能上人を日蓮宗からの正式な留学生とするという動きもあったようである。しかし、明治三十四年十一月十一日付で、山田一英上人に宛てた書簡には、「或る人は身延よりの派遣生とせよとの事なるが、小生は何れにても敢えて尽くすの一点に変わりなき積りに候えば、何れとも同様に心得居り候え共、若し身延より学資を供するが故にとの条件ならば、平に御断り申す可く候」と伝えている。自分が留学したのは「尽くす」いわゆる奉公の為であって、経済的な援助を受けるために身延山の「派遣生」という肩書きを得ることはしないというのである。ちなみに一能上人の留学費用は、師匠の眞能上人が勧募帳を手に檀家廻りをするなど、所縁の人々によって捻出されていたと思われる。

留学中、上人は宗門の青年僧にあてて書簡を送っている。そこには「最も深く宗門の衰退を知り、最も深く宗門の天職を自覚した吾れ等青年は、他に率先死力を尽くして働くべきの義務を負うて居る者ではないか」「日宗青年と名乗りながら、諸君は余りに自らを卑下して居られる。…日宗青年の実に独立自尊心の欠乏の度の太しいのに泣いた」（以上、明治三十五年八月二十日付書簡）など、遠く西欧の地から青年僧を鼓舞する言葉を並べている。当時宗門は「即ち所謂先輩諸老師は逐日に老衰の一途に忙わしく、克く二十世紀に立つべき、活ける青年の指導をは思いも寄らず」（明治三十六年一月二十日書簡）と、明治の新たな社会変化に対応した青年僧への教育が実現できていなかったものと思われる。そのような現状への危機感が一能上人には強くあったのであろう。一能上人がこのように宗門と距離をおいた立場にあろうとしたのは、一種の宗門の改革という姿勢を貫く為であったのかもしれない。ちなみに、この書簡で使われている「独立自尊」という言葉は、一能上人の慶應義塾の師である福沢諭吉の掲げた言葉である。上人の原点に福沢諭吉門下で学んだ日々・経験があったことも伺える。

明治三十六年（一九〇三）九月、上人は帰国する。その年の年頭、東京で学ぶ檀林生達に宛てた書簡では、「秋天高く、肥馬嘶くの好季に在らんと存じ候」と充実した成果を得てきたこと、そして、「宗家が不肖に対する態度奈何は、少にしては生一身の事に外ならずと雖も、之れを大にしては、宗家青年全体の運命に繋がる。吾人青年が、其の態度奈何によって、将来執るべきの方針に確たる基礎を与うるを得るの機、且さに生の帰朝によって一決せんとす」と、「不肖」＝一能上人が西欧で学んだ成果をどう「宗家」＝宗門が受け入れ、上人自らが生かしていくか、それが宗門の青年僧、ひいては宗門の運命を左右すると述べている。こうした未知なる西洋文化に接するなかで熟成された成果や志が、大きなエネルギーとなって、帰国後の多方面にわたる活動の源となっていったのである。（つづく）

明治36年秋、アメリカコネチカット州ニューヘブン市にて（一部のみ掲載）。左が柴田一能上人。この写真には禅研究者の鈴木大拙師（中央）や日蓮宗の鈴木真浄上人（写真右）など、計7名の留学僧たちが写っている。（『禅僧留学事始』より転載）